

# 変化する中国語

## Chinese Language in Change

依藤 美江子\*  
Mieko Yorifuji

### はじめに

ことばは時代とともに変化する。発音・語彙・文法の三つの側面から見れば、もちろん語彙の面での変化が突出して大きい。しかし、他の二つの側面についても変化がないわけではない。ここ二十年あまりの中国社会の変動はきわめて大きなものであったが、社会の変化が大きければそれだけことばの変化も大きいことは当然であり、中国語も大きく変わってきている。

本稿では、筆者個人の対中国語圏向け中国語放送のアナウンサー兼翻訳者としての、二十数年の経験も踏まえて、中国におけるアナウンスのスピードの変化について初歩的な考察を行った。同時に、外来語と漢字の近年における変化についても若干の言及を行った。

### 1. 速くなる中国語

#### 1. 1 速くなる日本語

英文学者外山滋比古が次のようなエピソードを取り上げている。

「かつてアメリカのあるテレビ局でこんなことがあった。CMのテープをまわす係が勘ちがいして、早まわしにして流してしまった。た

いへんなスピードでしゃべるコマーシャルになった。局が大あわてしたのはいうまでもない。ところが思いもかけない反響があった。たいへん好評で、コマーシャル効果はふだんの比ではない。スポンサーは大喜び、ミスした係のものも逆にほめられたりしたという。」<sup>(注1)</sup>では、何事によらずアメリカの影響を受ける傾向のある日本の状況はどうであろうか。若い人々の日常会話、流行歌、歌謡曲等のテンポ、……ことばに関わりのあるあらゆる面で、そのスピードがどんどん速くなっているという実感を抱いているのは私一人ではないであろう。以前は初めて聞く歌でも、歌詞をほとんど聞き取ることができた。今ではそれがほとんど不可能に近い。甲高いリズムでテンポも速く、歌詞の中には盛んに英語が持ち込まれ、歌い方まで「英語式」になっていることが少なくない。電車の中でも、中学生や高校生たちが早口でおしゃべりをしているのをよく目にする。時には、休みなく猛烈な勢いで、相手が口を挟む余地がないほどである。

このように、話すスピードが速くなっているのは、放送関係も例外ではない。ラジオもテレビもスピードのあるほうが現代的だという考え方が無意識の内に広く行き渡っているのである。

\* 基礎教養課程

う。キャスターも、リポーターも、ニュースの読み方も一般にその速さを増している。そして、このことは統計的にも裏付けられる。

最上勝也によると、「1960 年前後は、一般ニュースの読みの速さは、漢字かな交じりの字数で、一分間に三百字前後とされていた。……

(中略)……現在の一般ニュースは三百字台後半から四百字前後が多く、要約ニュースでは五百字を超える場合がある。」という。(注<sup>2</sup>) つまり、ニュースの読みの速さが過去三十年間におよそ二、三割増しにもなっていることを示している。

もちろん、そうなったのは、放送言語を取り巻く状況が大きく変化したこと、例えばテレビにおいては、映像が主体となり、ことばを映像に合わせる必要もあって、厳しい時間的制約を受けること、情報化時代の中であって、一定の時間の枠の中で多くの情報を伝えなければならないことなど、客観的状況の変化に基づく要請であるという側面が存在することは言うまでもないことである。

## 1. 2 中国の放送のスピードアップ

さて、本稿の考察の対象である中国語の状況はどうであろうか。ニュース放送のスピードと言えば、かつて中国では普通のニュース放送以外に極めてスピードの遅いユニークなラジオのニュース番組が存在した。それは、毎日一定の時間に、ラジオで主要なニュースを、ゆっくりとした口調で、一句ずつ数回繰り返しながら放送し、それを受信者に聞き取らせ、書き取らせる「記録新聞」(記録のためのニュース)という番組であった。(注<sup>3</sup>) 中国は人口も多く、国土が日本の二十数倍という広さである。1970 年代の頃までの中国は、交通・通信手段が未発達であり、新聞や雑誌の配布・配達には、地域により、相当の日時を要した。また、言語の方言差が大であることもあって、速やかに全国的にニュースを伝達・徹底するためにこのような番組が考え出された。因みに、70 年代までの日本の中国語学習者には、学習手段の一つとして

この番組を活用した人も少なくなかったようだ。この極端にスピードの遅い「ニュース」番組は一定の歴史的役割を終えて今では存在しない。

話を現代にもどそう。私は NHK 国際放送局(ラジオジャパン=RJ)(注<sup>4</sup>)で、中国語放送のアナウンサーを勤めて二十数年になる。中国に関わる仕事をしていることから、中国を知るための情報源の一つとして、また、時事、ニュース用語や新語などを吸収する手段の一つとして、NHKの衛星放送やCS放送を通じて中国中央テレビ局 CCTV を視聴している。ここでも次第にことばが速くなってきているようである。

CCTV では毎晩日本時間夜 20:00 (北京時間 19:00) から、35 分間の全国ネットで流されるニュース番組「新聞联播」(「新聞聯播」)が放送される。マスコミやメディアを党や政府の政策や方針を伝える手段と位置づけている中国では、この番組は、政府が最も重視し、国民も党や政府の方針を知る手段として欠かさず見るため、一貫して最高の視聴率を誇っている。最も重要視されていると思われるこの番組で、現在のニュースの読みの速さを、同じ番組の10年前のスピードと比較してみた。

中国でまだラジオ放送が中心だった七十年代には、ラジオのニュース放送のスピードは、一分間に漢字にして 210 字前後が一般的だった(中国語には仮名がないので、文字はすべて漢字)。(注<sup>5</sup>) また、HSK=(Zhongguo Hanyu Shuiping Kaoshi) 中国汉语水平考試(注<sup>6</sup>)では、コミュニケーションあるいはニュース放送の標準の速さであるとして一分間に 180~220 字のスピードのヒアリングを課している(高級レベルの四級)。

ところが、九十年に入ると、テレビ放送で一分間に 250 字前後~280 字近くにまでなり、更に今年(2001 年)のテレビ放送では 300 字~310 字前後にまで増えている。20 年の間に実に約四割増しということになる。

以下は、上に述べた数値を実際の資料(注<sup>7</sup>)で示したものである。A は十年前の 1990 年 4

月 30 日 (263 文字) で、B は 2001 年 3 月 8 日 (314 文字) に放送された「新聞联播」の、それぞれヘッドラインから一分間の情報を示している：

A (1990 年 4 月 30 日, 263 字)

各位观众，这次“新闻联播”节目的主要内容有：国务院今天发布关于解除在西藏自治区拉萨市戒严的命令。新华社发表巩固安定团结，建设发展西藏的特约评论员文章。江泽民总书记接受苏联记者采访。杨尚昆主席在北京王府井大街。文化部举办庆祝五·一文艺晚会。下面请看详细内容。

本台消息，国务院总理李鹏今天签署国务院关于解除在西藏自治区拉萨市戒严的命令。命令指出，鉴于西藏自治区拉萨市的局势已稳定，社会秩序恢复正常，在拉萨市实行戒严的任务已胜利完成，根据中华人民共和国宪法第八十九条，第十六项的规定，国务院决定自 1990 年 5 月 1 日起，解除在西藏自治区拉萨市的戒严。现在播送新华社特约评论员文章。

(同上日本語訳)

皆さん (今晚は)、今日のニュースの主な内容は次の通りです：

国务院は今日チベット自治区のラサ市で実施していた戒厳令を解除すると発表した。新华社は「安定団結を維持し、チベットを開発建設しよう！」と題する特別論説委員の評論を発表した。江泽民総書記がソビエト記者のインタビューを受ける。楊尚昆主席北京の王府井大街を訪ねる。文化部がメーデーを祝う文芸の夕べを主催。それでは詳しい内容をお伝えします。

国务院の李鵬総理は、今日チベット自治区ラサ市における戒厳令解除の国务院命令に署名した。命令では、チベット自治区のラサ市の情勢はすでに安定し、社会の秩序も正常に戻り、ラサ市における戒厳令の任務の遂行も勝利のうちに終了したと考え、中華人民共和国憲法第 89 条、第 16 項の規定に基づいて、これまで国务

院がチベット自治区のラサ市で実施してきた戒厳令を 1990 年 5 月 1 日以降、解除することに決定した。それでは新华社の特別論説委員の評論を放送いたします。

B (2001 年 3 月 8 日, 314 字)

各位观众，晚上好！(男) 晚上好！(女)  
今天是 3 月 8 号，星期四。欢迎收看“新闻联播”节目。这次节目的主要内容有：江泽民主席参加云南，四川代表团审议时，强调要解放思想，实事求是，团结一心，开拓进取，奋力开拓社会主义现代化建设新局面。江泽民会见孟加拉国民主主义党主席卡利达奇亚和他率领的该党代表团。李鹏，朱镕基，胡锦涛，李岚清，分别参加九届全国人大四次会议，安徽，天津，香港，澳门，浙江，贵州代表团全体会议，与代表们一起审议关于国民经济和社会发展第十个五年计划纲要的报告和计划纲要草案。全国政协九届四次会议举行第三次全体会议，十一位委员就经济建设和科教文体事业发展等问题，做大会发言。李瑞环出席会议。出席九届全国人大四次会议和政协九届四次会议的代表和委员们继续分组审议和讨论关于国民经济和社会发展第十个五年计划纲要的报告。

(同上日本語訳)

皆さん今晚は (男)、皆さん今晚は (女)、3 月 8 日木曜日の「新聞联播」です。今日の主な内容は次の通りです：

江泽民主席は雲南、四川代表団との協議に出席し、柔軟な思考力と事実に基づき真実を求めるという態度の重要性を強調した。また、一丸となって、社会主義の現代化建設に積極的に取り組み、新たな新局面を作り出そうと呼びかけた。江泽民、カリダキア主席を団長とするバングラデシュ民主主義党代表団と会見。李鵬、朱镕基、胡锦涛、李嵐清等、第九期全人代第四回大会に出席するとともに、安徽、天津、ホンコン、マカオ、浙江、貴州各代表団の全体会議に出席し、代表たちとともに国民経済と社会発展

に関する第十次五ヶ年計画の大綱報告と計画大綱の草案審議に参加した。全国政治協商会議第九期第四回会議の第三次全体会議が行われ、十一名の委員が経済建設並びに科学教育、文化スポーツ事業発展の問題について発言した。李瑞環も会議に出席。第九期全人代第四回大会と全国政治協商会議第九期第四回会議に出席した代表と委員たちは、引き続き分科会を開き、国民経済と社会発展に関する第十次五ヶ年計画の大綱報告について審議と討論を行った。

以上中国語、和文ともアンダーラインを引いている部分が読みが速くなったことによって増えた部分を示す。つまり同じ一分間でこれだけの字数の差が生じてきたということである。同じCCTVに日本時間夜 11:00 から始まるワイドニュース番組「晚间新闻报道」(「晚间新闻报道」)がある。国際ニュース、国内ニュース、スポーツニュースがそれぞれ約 15 分放送され、間にコマーシャルが流される構成になっている。ここでは前述の「新聞聯播」より更に速く、時にはもうこれ以上速くはならないというスピードで放送されることも少なくない。

生活のテンポは歩き方や話し方に現れるといわれる。中国も開放政策を取るようになって 20 年近くになり、また他の国々と同様にグローバル化時代を迎えている。上述のような現象が見られるのも、社会の変化を背景に持つむしろ当然の結果であるとも言えよう。

### 1.3 日本の中国語放送のスピードアップ

中国国内の放送においては、このように明らかにアナウンサーの読み方のスピードが速くなっていることが分かる。では短波を使って国外へ向けてラジオ放送を行っているNHKの中国語放送の場合はどうであろうか。ここでも全体としては速く成っている。いささか私事にわたるが、私が大学を卒業して、国際放送の仕事に従事したばかりの頃、200 字詰め原稿用紙 1 枚を 1 分間前後で読むようにと指導されたこと

をよく覚えている。これは当時の中国国内のニュースのスピードよりやや遅めであった。短波放送というものの性質を考慮に入れた上で決められたもので、1 分間 200 字は一つの目安だと言われた。ところが現在は 10 分間のニュース枠の中で、冒頭のあいさつの言葉、番組の予告などを含めておよそ 2170~2370 字だ(ニュース自体はその内 2100~2300 字)。やはり速く成っていることが分かる。

ところで、現在のNHKの中国語放送において、遅い場合と速い場合で、なぜ 10 分間に 200 字もの差があるのかと言えば、それは、その日のニュースの情報量、ペアーを組んで読む男女二人のアナウンサーの能力、下読みの時間の有無など諸々の要素と関係してくるのである。ここで言うアナウンサーの能力とは、読み上げるニュースの内容への理解度、情報量の違いに応じて読むスピードを調節する能力などのことである。スピードについて言えば、アナウンサーによっては、1 分間に 210 字が限度で、それ以上のスピードでは読めない人もある。そのような場合には担当ディレクターが原稿を一部カットするなどの調整を事前に行っておく必要がある。

私が翻訳とアナウンスを担当したことのある番組の一つに、5 分枠の「ニュース解説」(タイトル名<一天一題>)があった。前述のように 200×5P、即ち 1000 字前後を読むアナウンサーが多い中、200×5.5P、時には 200×5.7P も読み上げてしまう私に、「依藤さんがこんなに読んでも、不思議とそんなに速く感じないのだが…」と、ディレクターが首を傾げながら私に対して語ったことがあった。そのようなこともあり、中国語に翻訳される日本語の原稿も自然に多めに渡されるようになったのである。同じようにニュースのアナウンスをする場合にも、平均の 10.5P を大幅に越えて 12P 近くにもなるかということがあっても、あまり原稿を削ろうとしないこともある。当然のことながら、分量が多いほど情報量も多いのであるから、他の要素を考えないとすれば、原稿は多いほど好

い、特に重要なニュースが多い日など、ディレクターとしてはアナウンサーの能力を斟酌しながら、少しでも多くの内容を一定の時間内に盛り込もうとするのである。

ところで、字数を多く読んでいるのに、それを速く感じさせないのはなぜか？私は長い間、このことについてあまり深く考えてみたことはなかった。ただ漠然と、アナウンサーのテクニックの問題であるくらいに考えていた。最近になり、そのことについて、もう少し客観的な根拠を見出したいと思うようになった。

#### 1. 4 スピードとポーズ

これまで単なる言葉の吸収と中国事情を知る手段として見ていたCCTVのニュース放送を、別の角度から注意して見るようにした。前にも取り上げた夜11時（北京時間10時）から放送の総合ニュースには、レギュラーとして登場する男女五、六人のアナウンサー（中国CCTVに登場するアナウンサーは、いずれもアナウンサー養成の専門大学の卒業で、数年の学習・訓練を経て、初めてアナウンサーとして正式に登用される。中央テレビ局のアナウンサーは全国放送を担当するのであり、いずれも選りすぐりの人材であることは容易に想像がつく。こうした優れたアナウンサーたちを批評することには、若干の躊躇を覚えるが、以下はあくまでも私個人の観察に基づく相対的な比較に過ぎないことを初めにお断りしておきたい）がいる。私はこれらのアナウンサーの放送を長く聞いているうちに、①「アナウンスのスピードは速いのに聞いて分かり易いアナウンサー」と、②「スピードでは必ずしも前者ほど速くはない（字数でチェック）にもかかわらず分かり易さという点で劣るアナウンサー」の二つのグループに分類できることに気が付いた。更に注意深く観察してみると、速くても分かり易い①グループのアナウンサーの読み方には、共通して次の特徴があることが判明した。つまり、全体の読みは速いが、要所要所即ち重要な部分は少しゆっくりめで、各ポーズはやや長め。一方、②グループの

方は、前者に比べて、同じ時間内における字数が少ないにもかかわらず、その読み方は、「速く忙しく」感じられる。また、読みのスピードがほぼ一様で、初めから終わりまで言葉が等間隔に並ぶ感じで、言葉にメリハリが少なく、ポーズも短い。

例えばアメリカで同時多発テロ事件が起きた後、前述の「晚间新闻报道」の中で、アメリカのシリコンバレーのある会社が、瞬時に十本の指の指紋を読み取ることができる技術を開発したという内容のニュースが伝えられた。

原文は以下のとおりである：

美国硅谷一家公司 / 最近开发了一种 / 新式指纹扫描技术 / / 这种技术 / 能够快速读取 / 十个手指的指纹 / / 如果在飞机方向舵上 / 运用这种技术 / 将来的飞机 / 将只有被认可的飞行员 / 才能驾驶。

（参考日本語訳）

アメリカのシリコンバレーのある会社（で） / 最近（……が）開発されました / 新型の指紋読取機 / / この技術では / すばやく読み取ることができます / 十本の指の指紋（を） / / もし飛行機の操縦桿に / この技術を応用する（と） / 将来の飛行機（は） / 認識されたパイロットのみが / 操縦できることになる

①グループに分類したあるアナウンサーは、全体としては速いスピードで読んでいたが、斜線（/）の箇所にはポーズを、ダブル斜線（//）の箇所（句点をつける箇所とも一致）にはやや長めのポーズを入れて、速さによって生じる聞き取りにくさを、カバーすることに成功している。

しかし、同じ時間の中で、読みが比較的ゆっくりでも、ポーズの箇所が少なかったり、メリハリに欠けたりすると、必ずしも聞き取りやすいとは限らない。つまり、かなり微妙ではあるが、この一見情報の無い無駄な空間のように見えるポーズ、そしてそれをとるタイミングとそ

の長さの加減が、聞き手に理解しやすいアナウンスを成立させるために欠かせない重要な役割を果たしていることがわかるのである。聞く者にとって、分かり易いか分かり難いかは、実際の話すスピードというよりは、むしろ話す者のポーズの取り方如何に左右されると言えるようである。

情報化時代にあっては、おなじ時間の枠の中で、可能な限り多くの情報を伝えられるに越したことはない。情報を多く詰め込もうとすれば、スピードも必然的に速くなる。もちろん、聞き取りに可能なスピードに制限はあるが、必要最小限のスピードアップは時代の要請でもある。正確で美しい発音が求められることは言うまでもないが、それ以上に大切なのが、聞き手にとって、正しく理解できる放送であることである。アナウンサーは原稿の棒読みに陥ることのないように、下読みの時間を十分に取って（時間が十分に取れないこともありうるので、普段から可能な限り速く、正確に内容を把握する力量を備えるよう努力する必要があるが）、内容を十分に理解しなければならない。また、ことばの緩急、間の取り方即ち前述のポーズの置き方、ストレスや語気、リズムなど様々な面に注意を払うことのできる能力を高めることが必要であろう。このようにして初めて、アナウンサーは自らの力でスピード自体をコントロールできるレベルに達することになるであろう。

## 2. 外来語に見る変化

表音文字である仮名も持っている日本語と違って、表意文字である漢字しかない中国語では、外来語を取り入れることの難しさは本来、日本語の比ではない。そのために、中国語では従来、外国語を取り入れる場合、外来語というよりも、第一に、自国の言葉に翻訳して用いる傾向が強かった。つまり意識である。例えば、

ビデオ→录像机（像を録画する機械）

レコード→唱片（歌う盤）

マンション→高級公寓（高級なアパート）

エレベーター→电梯（電気梯子）

などがその例である。これらの事物自体は確かに外来の事物ではあっても、ことばは中国語の造語法の規則にのっとり作られた語で、いわゆる外来語であるという感じはいささかも感じさせないものである。

第二は、元の外国語に近い音を持つ漢字を用い、しかも同時に漢字の持つ意味も活かすべく工夫したもの。いわば漢字の持ち味を充分に発揮させたもので、この二つの条件を満たした漢字で合成する。即ち音訳と意識の二つを兼ねた方法である。例えば

コココーラ→可口可乐（漢字の発音が原音に近く、「口当たりがよく、楽しい」という意味も持たせている。）

ビール→啤酒（第1字めが「ビール」の音に近い音を持つ漢字で、第2字めが「酒」という範疇のもの」であることを表す。）

第三に、完全な音訳で、国名、地名、人名などに多く用いられる場合。例えば

パキスタン→巴基斯坦

ウィーン→维也纳

ブッシュ→布什

などがそれで、原則としてこれらの語で用いられている漢字には意味を持たせていない。

以上の3種類の方法が従来の「外来語」の撰取方法であった。しかし開放政策を取って約二十年、この間、外国から入る情報量は、かつて無いほど多くなり、意識中心の方法だけでは追いつかないという事情があること、また学校における英語教育が普及したこと、更には外来語を使うことに対して一種のカッコよさを感じるという社会風潮も手伝って、音訳によるものや、開放前ほとんど使われなかった横文字に対する抵抗も和らいで、そのまま横文字を使うことも多くなった。

例えば、機構名などは新聞やテレビ報道の中では、多くの場合、一回目に出てきたときは、横文字とその意識にあたることばの両方を併記し、又は合わせて言う。二回目以後は横文字のみ、または中国語訳の略語で言うことが多くなった。例をあげると、

W T O (世界貿易組織, 略して世貿組織)

B B C (英国广播公司)

A P E C (亞洲太平洋經濟合作組織, 略して  
亞太經合組織)

I B M (國際貨幣基金組織)

などである。その他、機構名や組織名ではないがそのまま使われているものとして、O A, C T, C D, D N D, D V Dなどが挙げられる。

比較的新しく生れた音訳のことばの例としては、次の様なものが挙げられよう。

インターネット→因特网

エルニーニョ→愛爾尼諾

エイズ→艾滋病

クローン→克隆

ディンクス→丁克

ソニー→索尼

ソナー→声呐

ディスコ→迪斯科

カラオケ→卡拉OK

フーリガン→胡里根

アルツハイマー(病)→阿尔茨海默(病)

など。

今後中国が開放政策を取り続ける限り、意識の方法を中心としつつも、音訳のもの比率も次第に多くなっていくことが容易に想像できる。

### 3. 繁体字の復活

中国では、建国後、正式には1956年から、簡体字(中国語では“简化字”と言う)が正式の文字として、学校教育の中でも徹底され、今

日に至っている(因みに、外国人も中国語を学ぶときは日本の漢字(同じものも一部ある)とも、また香港や台湾などで使われている繁体字とも異なる、画数の少ない簡体字を覚えなければならぬのであるが)。ところが近年、簡体字の教育しか受けていない筈の世代や中学生、高校生の間にも一部、繁体字を使用する傾向が出てきている。私が担当している「リスナーとともに」という番組に寄せられる沢山の便りの中にも時折、繁体字または繁体字交じりで書かれたものがある。

これもやはり開放政策によってもたらされた現象の一つである。開放政策をとることにより、外国や繁体字を使用している香港(1997年に英国より中国に返還された)や台湾との経済や文化の交流が盛んになり、ビジネス上の必要から広がっていったとも言われている。読めるだけではなく、書くこともできれば能力の一つとして自己ピーアールに有利であることに間違いはないし、またそれをステータスの一つだと考えていることもあるようである。しかし、中国政府が返還後の香港で、大陸で行われている標準語(中国で“普通话”と言う)の教育に力を入れていること、シンガポールの華人も、簡体字を使っていることなどを考えると、繁体字が、正式に認められている簡体字にとって替わることはまずあり得ないと思われる。ビジネスの必要から使用されている場合を除けば、一種の流行と考えてよいであろう。

### 結 び

ことばは生き物である。それを取り囲む環境が変われば、ことばも変化するというのは自然なことである。中国語についても、それは同じである。閉鎖を解き開放政策をとって20年近くともなれば、かつてない大きな変化が起きるのは不思議ではない。その様々な変化に対してことばの専門家たちが、浄化や純潔を守るよう呼びかける。われわれも今後の中国語を見守っていかねばならないようである。

## 注

- (1) 外山滋比古「現代社会とことばのスピード」p25(『言語』第28巻第9号所収)
- (2) 最上勝也「ニュース報道の読みの速さとその計測法」p40(『言語』第28巻第9号所収)
- (3) 「記録新聞」の番組では、語句や文字に注釈をつけて書き取りの便を図った。例えば、「敵機」には「敵の飛行機」,「公」には「公共の公」という具合である。詳しくは牛島1973参照
- (4) 世界の主要な言語によるNHKの国際放送。中国語圏向けにも中国語によるニュース、各種番組が毎日放送されている。
- (5) 私がNHKでの仕事に従事し始めた頃、中国語放送のスピードの一参考資料として、語られていた数値。
- (6) 中国国家教育委員会の正式認可を得て、国家対外中国語教学指導グループ弁公室と北京語言文化大学が毎年定期的に中国国内と海外で共同で行う中国語の能力試験。
- (7) いずれも筆者が録画保存していたものを利用。

## 参考文献

- 1) 牛島徳次監修 漢語研究会編 「北京放送」聞き取りの基礎 龍溪書舎 1973年9月
- 2) 『言語』第28巻第9号 大修館書店 1999年9月
- 3) 高名凱等《現代漢語外來詞研究》文字改革出版社 1958年2月
- 4) 趙玉明《中國現代廣播簡史》中國廣播電視出版社 1987年12月
- 5) 《當代中國》叢書編輯部 《當代中國的廣播電視(上)》《當代中國的廣播電視(下)》中國社會科學出版社 1987年3月
- 6) 施旗《廣播電視語言》中國廣播電視出版社 1988年12月
- 7) 畢征主編《播音文體業務理論》北京廣播學院出版社 1989年8月
- 8) 《廣播電視簡明辭典》編輯委員會 《廣播電視簡明辭典》中國廣播電視出版社 1989年8月
- 9) 張頌《播音創作基礎》北京廣播學院出版社 1990年3月
- 10) 譚細心《廣播電視語言分析》中國物資出版社 1990年10月
- 11) 史有為《異文化的使者—外來詞》吉林教育出版社 1991年4月
- 12) 張頌,喬實《論播音藝術》北京廣播學院出版社 1992年10月
- 13) 張頌《播音語言通論—危機與對策》北京廣播學院出版社 1994年2月
- 14) 國家對外漢語教學領導小組辦公室漢語水平考試部《漢語水平等級標準與語法等級大綱》高等教育出版社 1996年6月
- 15) 徐恒《播音發聲學》北京廣播學院出版社 1999年2月
- 16) 史有為《漢語外來詞》商務印書館 2000年1月
- 17) 邵敬敏〈香港方言外來詞比較研究〉《語言文字應用》(語言文字報刊社 2000年第3期)所收
- 18) 白龍《播音員主持人訓練手冊》北京廣播學院出版社 2001年1月
- 19) 萬波〈香港與新加坡大專學生繁簡字認讀能力調查〉《語言文字應用》(語言文字報刊社 2001年第2期)所收
- 20) 高有祥〈廣播電視有聲語言冗余度新探〉《中國語文》(商務印書館 2001年第4期)所收